



今年のイベントの目玉は「夢みるこども基金の森」ができたこと。「命」のイベントにも感動したという原稿が寄せられました。「森から人へ」の命のリレーの新聞になったよ!

※「ECOko」とは環境問題を考えるこどもたち、Ecology+Kodomoの造語です。

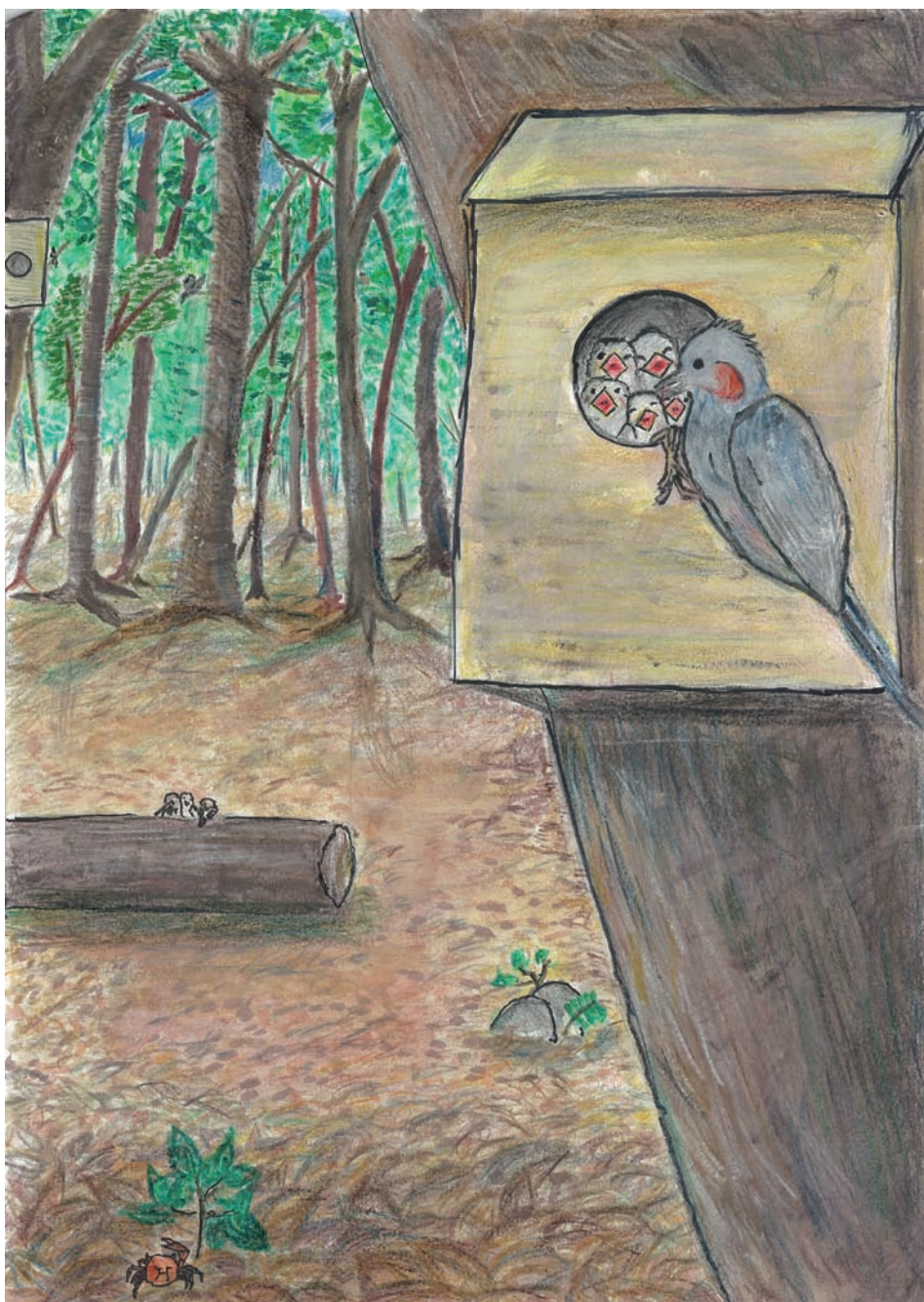
「夢みるこども基金の森」オープン

こどもたちの歓声が広がる

2010年
夢みるこども
キャンペーン
第16回イベント
特集号

命溢れるーごも基金の木々

この絵は、設置された巣箱で鳥達が子育てする姿を思いうかべて描きました。イラスト・林 桜子



イベントプログラム
 【2010年7月31日(土)】
 午前◇虹の松原で松葉掻き(佐賀県唐津市)※一部参加者
 午後◇「夢みるこども基金の森」開き(佐賀市三瀬村)
 【2010年8月1日(日)】
 午前◇水素カー試乗(福岡市)
 ◇「共に生きる社会のために～命(いのち)の現場をみつめて～」

▽天神中央公園(同)
 ・手話ダンス(北野教室)・「移植を待つ家族の会」の体験談、移植推進の呼び掛け・福岡県すこやか健康事業団の活動報告、がん患者の体験談・樹木医による樹木の健診など
 午後 ▽若年性認知症の方々による天神オアシスクラブ(同)
 ▽栄光病院・ホスピス病棟(福岡県志免町)

2010年
夢みるこども
キャンペーン
第16回イベント



林 桜子
東京都
蒲原中3年
第14・16回生

新しい看板とツバキは、これからも多くの人達が目にする事ができるでしょう。

次に、林野庁の方が森について様々な事を解説して下さいました。とても勉強になりました。

森の散策をして、森には木々の良い香りや、沢の流れる音、虫達の声が溢れていました。普段、車の排ガスや騒音の中で生活している私にとって、それはとても癒されるものでした。

これから、多くの子供や大人、動物達が楽しみ、そして癒される森になったらいいなと思いました。

私たちの夢がついにはかないました。夢みることはすごいことです。



7月31日、「夢みるこども基金の森」に私達15人の子供達は訪れました。この森は、私が初めてこども基金に参加した2年前の第14回こども会議で決まった「かなえたい夢」が実現したものです。私達は最初に、森の入り口に看板を立て、看板の裏にツバキの苗を記念植樹しました。「夢みるこども基金の森」と書かれたその



高野 愛花
福岡県
宇美中2年
第14・15・16回生

森に入って

バスを降りてすぐ、私は自然の音にかこまれました。木の葉のゆれる音、水の流れる音。中でも一番良く聞こえたのは「セミの声」でした。私の町でもよく聞くアラゼミをはじめ、クマゼミ、ニイゼミなどさまざまでした。森は全く

と違っていいほど、人の手が入っていない、ありのままの森でした。ほとんどが広葉樹で、地面には落葉のじゅうたんがあり、その上で風が吹くたびに「こもれび」がゆれていました。森は山桜やカシなどを中心に、つきや木の皮がサロンのパスの臭いがする木など様々でした。

森の中の小川の水は、町や市の川とは全くちがって澄んだきれいな水でした。鳥の求婚期には巣箱をかけておくそうです。人とたくさんの生き物たちが「打ち消し合う」のではなく、「共存」できる森になりま

すように...

「夢みるこども基金」ホームページはこちら

「環境こども新聞・エココ」の投稿がホームページからも出来るようになっています。

ホームページを開設している歯科医院の方は基金ホームページへのリンクをご検討ください。

URL : <http://www.yumemirukodomo.jp>

Webでの検索は 検索

歯医者さんありがとう! 私たちのキャンペーンは歯科医院などから提供していただいた金属冠で支えられています。

2面	手話ダンスを見て(濱屋江里)、「移植を待つ家族の会」江田さんの体験談を聞いて・記事(堀江浩司)&イラスト(樋渡工)、栄光病院を訪問して(堀江浩司)、ガン体験談を聞いて・記事(高野愛花)&イラスト(樋渡工)、認知症、江島さんの講演から学んだ事(崎津優誠)
3面	環境インタビュー①(堀江健一郎)、樹木医の話を受けて・記事(秋元純)&イラスト(村山玲遠)
4面	イベントでのアグネス・チャン理事を描きました(倉園勇二、上森悠史)、水素カーに試乗して・記事(田中太郎)&四コママンガ(倉園勇二)、イベントに参加して感じたこと(堀江幸奈、江藤萌生、中原大成)、あとがき(堀江健一郎)、原稿募集、おことわり

いのち 「命」のイベント

メイン会場の公園から 若年性認知症の方々のクラブ、ホスピス病棟へ感動の交流が続く



濱屋 江里
大阪府池田中3年
第14・15・16回生

手話ダンスを見て

私は、手話ダンスを見て改めて手話の大切さを知ることができました。

手話を通してしかコミュニケーションをとることが出来ない方がいらつしやることの認識を広め、みんなが笑顔で生活できる社会でなければいけないと思いました。

人の心と心をつなぐ手話を楽しく表現した皆さんのダンスはとても素晴らしいかったです。ありがとうございました。

これからも、この活動を頑張っていく予定です。



イラスト・濱屋 江里



堀江 浩司
福岡県城南中2年
第13・15・16回生

「移植を待つ家族の会」江田さんの体験談を聞いて

今年のイベントの中で、江田さんの心臓移植体験談があり、僕は他人事には思えなかった。今年臓器移植法が改正、施行されたそうだが、それでもまた国内で臓器移植手術を受ける事は困難な状況だという。アメリカでは、年間22000から23000例程あるのに対し、日本は昨年7例しかない現実。臓器移植を希望し登録している人は169名。どんな想いで待っているのだろう。気管切開をしている僕自身も、日常生活に吸引は必要不可欠なものだが、これが不本意な法律によって僕の学校生活にも影響をおよぼした。人の命を守るべき法律が、時として生きる希望を奪ってしまったという現実。今回の江田さんの話を聞いて、さらに法改正が進み、より多くの命が救われる事を切に願う。



移植医療イラスト・樋渡 工

栄光病院を訪問して

栄光病院を訪問する前、僕は色々な事が頭の中を駆け巡り、踏み出す足も重くなっていました。けれども、交流会場へ案内され、僕達を歓迎して下さいました。病院のスタッフの方々やホスピス病棟の皆さんの明るく温和な雰囲気、即座に僕の不安を打ち消してくれました。そこで話された近藤さん家族の愛の力には、誰もが涙を流さずにはいられなかったと思います。死と向き合いながら過す一日一日、僕には想像できませんがここには笑顔がたくさんありました。機会があればまた訪れてみたい、という想いを胸にバスから手を振りました。



樋渡 工
佐賀県鍋島中3年
第15・16回生

向きの重いの病気が合っている患者さんには笑顔がいっぱいでした。



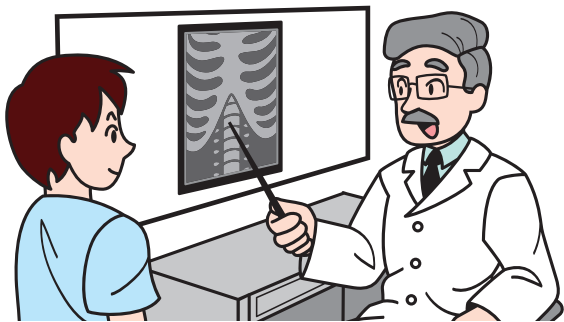
高野 愛花
福岡県宇美中2年
第14・15・16回生

ガン体験談を聞いて

日本人の死因の第一位がガンであることを、みなさんは知っていましたか。3人に1人はガンなんだそうです。ほぼ1分半に1人のペースで、ガンで人が亡くなっているそうです。すると、1日でもずいぶん多くの人が亡くなることとなります。ガンになった人の多くは、「まさか、自分があるとは思わなかった」と考えるそうです。ガンにならないためには…

1. たばこは吸わない!! (肺ガンのリスクが20〜30%UP)
2. お酒はほどほどに!! (食道ガン、肝臓ガン、乳ガンのリスクUP)
3. 食事は偏らずバランス良く!
4. 継続して適度な運動を!
5. 太りすぎ、やせすぎに注意!

などがあげられます。今回のお話を聞いて、生活を



がん体験イラスト・樋渡 工



崎津 優誠
兵庫県芦屋学園中3年
第15・16回生

認知症、江島さんの講演から学んだ事

以前、アルツハイマー病患者とその家族の様子をテレビのドキュメンタリー番組で見た事があった。しかし、テレビだった事もあって別に心にとめることもなかったが、今回江島さんの話を聞いて、生きる事の大切さと健康である自分に感謝した。又、僕には祖父母がいて、5〜6年前に大好きな祖母が「うつ病」になった事がある。だから、祖母自身アルツハイマーにかかるのではと心配している面がある。江島さん自身もりこえて頑張ったけど、一番は家族の支えがあったから、今が有り来があるのだと思う。生きる事にかかせない、人との触れあい支え合い、そして一番信らいておけるのが家族、僕も家族のキズナを大切にしようと思った。江島さん、がんばってください。

環境 インタビュー

樹木も人間と同じく生きている 樹木のためにならないことを していることが多い

「樹木のドクター」

今回の環境インタビューは、夏のイベントにも出演して頂いた樹木医の白石先生である。

イベントの中でも僕が今まで考えもしなかったような事や、人間と同じように木にも生命があるといった事を分かり易く話して下さったので、樹木医という職種に僕は魅力を感じた。だから、僕は再び白石先生にお逢いし、インタビューをさせて頂けるというので、今日はどんな話を聞かせてもらえるだろうかとワクワクした後、再度基金事務局でインタビューをさせて頂くようになったにもかかわらず、快く足を運んで下さった白石先生に大木のような温もりを感じた。

木の健康を守る
樹木医の白石眞一さんに聞きました



堀江 健一郎
福岡県・城南高1年
第14・15回生

皆さんは造園業を兼務している人が多く、新しいものを造る造園業と病気の樹木を治療するという立場では少しかけ離れているのです。

堀江：それで、先生のように長い間、果樹園芸の研究に取り組んで来られた方に、果樹が病気になるたり弱ってきた果樹を、専門的に診てもらえると農家の方は助かりますよね。

白石：そうですね、だから樹木医は果樹園芸が一番役立つのかもしれないね。果樹園はちよとした事で被害を受け易いからね。

堀江：それでは今まで樹木医をされていく、苦労したとは何ですか。

白石：樹木は、色々な原因で病気になる。虫に食われて弱ることもありますが、本来はその木の生命力を信頼し樹木自身で回復することが大切です。それなのに、人間は見かけを気にして切り倒したり樹木に薬を塗ったりするので

が、これは木にとっても迷惑な事なのです。

今、公園や庭で、人間の勝手な樹木の為にならないことをしている姿をよく目にします。それをやめさせるのが私の仕事ですが、なかなか折り合いがつかない事もあり、苦労します。けれども、それが私の使命だと思っています。

堀江：そうですね。そこには時間の問題、お金の問題も出てくるので、もう少し大変ですよね。では反対に、樹木医をしていて良かったなと感じた事はどんな事ですか。

白石：そりゃあ、何となくも枯れ葉ばかりであきれていた木が、治療して青々とした葉が茂り、元気になった時ですよ。

またその他に、大きな道路を建設する時、そこに樹木がいろいろありますが、そんな時、その木を残す方法を自身の知識、経験から考え出します。でも、そんなと、その土地の住民と、県などの行政側との意見調整もしていかなければなりません。だから、それが実行された時は本当にうれしいですよ。

堀江：へえ、そんなんですね。樹木の健康管理だけでなく、そんな調整まで引き受けたいといけないのですか。

ところで、先生は人と木が共生する方法を考えていらっしゃると思いますが、現在、人間は明らかに樹木だけでなく自然そのものを壊そうとしています。この状況をどうのよう

り人間の命と樹木の命、どちらも壊れた地球環境の中では育たないというところである。だから、今、僕達が頑張らなければ。

Profile 白石 眞一

1933年(昭和8年)大分県生まれ。九州大学農学士・農学博士。大学卒業後、1956年より農林省九州農業試験場園芸部から福岡県園芸試験場に勤め、カンキツ栽培技術やブドウの育種を研究。その後は九州大学に勤務し、助教授、教授を経て1996年に退官。現在は樹木医として活躍中。主な樹木の治療例は福岡舞鶴公園サクラ樹の治療、JT日本たばこ産業の「飯田屋敷のイチヨウ」救命など。



村山 玲遠
福岡県
青葉小4年
第16回生



秋元 純
福岡県
福岡大学附属大濠中2年
第16回生

樹木医の話を聞いて

皆さんは樹木医という方がおられるのをご存知だろうか。樹木医は名前の通り木の医者なのだ。医者なのでもちろん木の健康を守っている。それは、木を切るなどして風と光の通り道を作っているのだ。しかし、こういうことは私たちにできない。何が出来るだろうか。木の根を踏まない・物を置かないということが出来る、と樹木医の方が言っておられた。ちよとしたことだが木にとっては大きなことなのだ。ではこれからちよとしたことかもしれないが日常の中で意識してみよう。



イラスト・村山 玲遠



樹木の健康診断法について説明する白石さん(左)

堀江：こんにちは、先日の夢みるこどもキャンペーン第16回イベントでは、お世話になりました。

白石：いえいえ、暑かったですね、皆さんのイベントでしたね。

堀江：もう面識もあるので、早速インタビューさせて頂きたい。イベントの中で、皆さんに向けてお話し下さった内容も、とても身近な事で興味深いことが多かったのですが、今日は地球環境問題も視野に入れて樹木医の立場からの考えやアド

バイをお願ひします。

堀江：実は、樹木医というのは僕自身大変興味のある職業なのですが、樹木医を始められたきっかけは何だったのですか？

堀江：それは、長年大学で果樹園芸の試験研究をしていました。定年退職の時、現在、農業に直接携わる樹木医が不足しているので、退職後は非、樹木医として活躍してほしいと、後輩から頼まれてきた。というのは、現在居る樹木医

堀江：最後に、僕達のメッセージをお願いします。



水素カーに試乗して

どんな車かなと思っていたけれど、見た目は普通の車でおどろきました。でも、外見は車でも、中は色々な音があつて、水ではなく水素という水の元になる物で車を走らせているという事も分かったし、その力は、最高速度155キロメートルというものすごい速さで、すごくおどろきました。それから、水素がばく発しないように、水素をためるタンクをいくつも重ねてあり、安全安心でした。

この事を参考にして、今以上の車をもっと安くで発明したいです。

今回ぼくの願いをかなえるために、こどもき金のスタッフの方をはじめ、福岡県庁の方々にもお世話になりました。とてもうれしかったです。ありがとうございました。



田中 太朗
鹿児島県
鷹巣小4年
第16回生



天神オアシスクラブで
イラスト・倉園 勇二(顔写真等は左)



上森 悠史
福岡県
千束中1年
第16回生



ガン闘病の経験があるアグネス理事は「毎日が誕生日」だと思って生きているそうだ!

～命の現場をみつ



栄光病院・ホスピス病棟で
イラスト・上森 悠史



eco
四コマ
マンガで考える地球環境

エコだけじゃない
すごい水素カー



倉園 勇二
福岡県
田隈小4年
第16回生

一日目の松ばかきでは、虹の松原の松をまもるための大切な作ぎようだと知りました。その後、ゆめみるこどもき金の森に行き、道のない森の中を歩いて、たくさんの自ぜんの生き物にふれました。

二日目、いろいろな病気の人やその家ぞくの人たちの話には、むねがはりさけそうになりました。でも、それは、わたしにもいつおこるか分からない身近な事だ、と思いました。

二日間だったけれど、たくさんの体けんといろいろな人たちと出会えて、とても楽しかったです。

僕は、天神オアシスクラブでのお話が忘れられません。オアシスクラブの人たちは、楽しかった日のことも、何日かたつとおぼえていられないそうです。とてもつらいことなのに、その病気に苦しみながらも、みんな明るくめげないでいられることがすごいなと思いました。そして、天神中央公園のイベントでも、栄光病院の中でも、大勢の人たちと一緒に大きな声で歌を歌いました。それが一番うれしかったです。



堀江 幸奈
福岡県
城南小3年
第16回生



「いのち」はだれにとっても身近なことだということをかみしめました。



中原 大成
埼玉県
黒浜小5年
第16回生

「夢みるこども基金」のイベントを通して、命の大切さをとても実感する事ができました。いろいろな方達の話聞いて、まじめに考える時もあったし、アグネスさんの話で心を打たれた時もありました。私はそんなに命について考える事がなかったから、このイベントでよく考えさせられました。これからは、イベントで聞いた話をしっかりと頭に入れて、今後の事まで考えていけたらいいなと思いました。



江藤 萌生
福岡県
原北小5年
第16回生

新聞作りに参加して下さい

こどもたちの手による「環境こども新聞・ECOko」は、基金のOB・OG会員はもちろんです。それ以外のこどもたちの参加も募っています。今回は夏に行われたイベント参加者によるイベント特集号となりましたが、通常は「地球環境保護」をテーマに投稿を募集しています。日々の生活の中での取り組みや、個人やグループでの活動など、「環境」に関することなら何でも結構です。みなさんの意見などをお寄せください。投稿規定は次の通りです。投稿者の氏名、所属(小、中、高校名と学年)、住所、連絡先を明記し、顔写真を添付して基金事務局まで送ってください。原稿、写真は基金ホームページからも投稿できます。また、原則として絵、イラスト、マンガはカラーでお願いいたします。

この新聞は年3回位の発行を予定しており、投稿は随時受け付けています。一人でも多くの方に新聞作りに関わっていただければと思いますので、みなさまのご投稿をお待ちしています。

● 投稿・問い合わせ先 ● 夢みるこども基金事務局

〒810-0042 福岡県福岡市中央区赤坂1-12-6-2F ☎092-751-0021
e-mail: jimukyoku@yumemirukodomo.jp FAX 092-751-0249
URL: http://www.yumemirukodomo.jp

「環境こども新聞・ECOko」への投稿待ってるよ!



「環境こども新聞」の
なまえが新しくなりました



「ECOko」とは
環境問題を考えるこどもたち
Ecology+Kodomoの
造語です。

あしがき 私たちの新聞の力で環境を守りましょう

堀江 健一郎
福岡県・城南高1年 第14・15回生

今回のECOko7号では、毎年夏に行われる第16回夢みるこどもキャンペーンイベントの特集を組んでみました。今年のイベントのテーマは、『共に生きる社会のために～命(いのち)の現場をみつめて～』と、一見重く難しいように思われますが、人の命だけでなく、現在僕達が行っている地球環境問題においても、とても大切なテーマです。自然と共存していかなければ、地球の生命は途絶えてしまいます。第1日目、『夢みるこども基金の森』のオープンイベントがあり、僕は

初めて基金の森へ足を踏み入れました。高野さんの感想にもあるように、人の手が入らない真の自然環境が残されている森。そこには漲(みなぎ)る生命力を感じました。そして、イベント参加者全員が過密スケジュールの中で受け止め方、感じ方は違っても「生命」に対し、真剣に考えるきっかけになったようです。また僕自身も、人間の命は自然の中で生き続け、ECOkoが未来の地球を守る新聞となるよう活動を拡げていきたいと決意を新たにしました。